魔界戦記ディスガイア AFTER OF THE MAOH

鉄コン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔界戦記ディスガイア　ＡＦＴＥＲ　ＯＦ　ＴＨＥ　ＭＡＯＨ

【Ｎコード】
Ｎ０６７５Ｏ

【作者名】
鉄コン

【あらすじ】
魔界戦記ディスガイアシリーズのエンディング後のアフターストーリー！
魔界戦記ディスガイアは原作と小説版のミックスストーリーだ！
魔界戦記ディスガイア２は原作と小説版とコミックス版のミックスよ！
魔界戦記ディスガイア３は原作と小説版のミックスですよ！
わ、我の出番が取られてしまった。俺は一向に構わないんだが……
クラァァーーーー！！！俺が紹介するところを何でお前らが紹介

してんだーーーー！！！

……ハッ失礼しました。ちなみに初代のディスガイアにはオリジナルキャラクターが何人か出てくるので読んでないと分からないかもしれません。エンディング後のストーリーを書き終わったら不定期に番外編として書いていこうと思います。

魔界戦記ディスガイア　その後（前書き）

はい、鉄コンです。まずお詫びがあります。すいません！どうしても間に合わなくて小説版のキャラクターが出せませんでした！とりあえずエンディング後のストーリーは書いたので何日か経ったらすぐに追加しますので、待っててください本当にすいません。

魔界戦記ディスガイア　その後

「帰ってきましたね～」

「帰ってきたってお前の家は天界であろうが」

「いいじゃないですか。私にとってのもう一つの家です」

「フロンちゃん案外早く魔界に染まりそうな気がするわ……」

「私は正直早く人間界に帰りたいのだが……」

「あら、私はもうちょっとこっちに居たいけど」

「オレも来たばかり出しな正直興味あるぜ」

「君たちな～～～」

「ゴードン、ココハスナオニアキラメロ」

天界・魔界・人間界の大戦争を戦ってきた者達とは思えないほど気の抜けた会話である。

「あ、殿下お帰りなさ～い」

城に居る全員でラハールたちを出迎える。

「な、何だ!?お前らがそろって出迎えるとは、天変地異の前触れか!?」

そう、ここにいる一部の者以外本当にテキトー極まりない悪魔ばかりで以前ラハールが「俺様のために働こうとは思わんのか？」と聞いた時も「アハハ、思うわけ無いじゃないですか」とあっさり返すような奴ばかりなのである。それがどういう事か今日ばかりは臣下どころかプリニー一匹残らず全員が出迎えているのである。

「ちょっと殿下それないんじゃないんですか？」

「せっかく、周りの貴族悪魔達が殿下のこと魔王として認めてくれたのに」

「何？どういう事だ」

ラハール達が天界に行ったことは魔界中にあっという間に広がり天子を倒したことが広がって貴族悪魔達の間ではちょっとしたヒーローになっていた。
そして、すぐ後に大天使を殴り飛ばした事もすぐに発覚して、今までラハールを魔王として認めなかった悪魔達は今では認めるどころか尊敬されているのである。

「だが、私たちが天界へ行ったことは私たち以外知らないんじゃないのかい？」

「ふむ、もっともだな」

「カーチス、君かい？」

「オレは天界に来るまで魔界には行かなかったから誰も知らないと思うぞ」

つまり、臣下の者たちも誰一人知らない。ラハール達も誰にも言っていない。ましてや貴族悪魔達が情報を持っていることなど一切合財ありえないはずなのである。

「サーズデイ分析をお願い」

「ピロピロピロ、ケイサンチュウ、ケイサンチュウ」

サーズデイのスーパーコンピューターが答えを導き出す。

「「答えは！？」」

一斉に全員が口を開く。

「プリニー、バラシタ」

「……」

なんとも微妙な答えに皆沈黙してしまった。プリニー達は魔界に星の数ほどいる。一匹が盗み聞きしそれが情報を伝えているうちに魔界全土に広がってしまった。納得は出来るが。本当に微妙な答えになってしまった。いつものパターンだったらラハールとエトナが八つ当たり攻撃をするのだが今回は魔王としての威厳を高めただけでなくいずれ当たる面倒な問題を解決してくれたのである。攻撃するどころかほめるべきなのだが……

「……どうするんですか殿下」

「……魔王玉！！」

何の前触れも無くプリニーに大技を出すラハール。

「ギャ～～～～っス」

「ヒドイッス～～～～～～」

やる必要は全く無いと思うのだが……

「何か妙な空気になってたしいいんじゃない？」

いいんじゃないってお前なぁ～～……って何地の文に話しかけとんのじゃ～～！！

「別にいいじゃん」

良くないわ！なにその軽さ！

「そ、それよりほらナレーション続けてくださいよ～話がムチャクチャになっちゃいますよ～」

あ、はいはい。

と言うわけで三界を巻き込んだ大戦争は様々な傷跡を残したが、全て終わり大団円と言う形で終わりを迎えた。

――天界での騒動から一週間を迎えたある日――

「そうか、あっちに帰るのか」

「ええ、スペースシップ、ようやく修理が終わってわ。魔界や人間界で起きたことをちゃんと伝えなきゃいけないわね。こんなにかわいい悪魔がいるって事もね」

「フン、馬鹿馬鹿しい」

そう、ゴードン達地球勇者一行は修理が終わり今まさに地球に帰るところなのだ。

「しっかし、結局ゴードンは人間達の戦い以外で役に立ってないような気がするんだけど……」

「気がするのではなくてそのままズバリではないのか？」

2人の毒舌は相変わらずである。

「2人とも別れの時位ちょっとは歯に衣を着せたセリフと言うのをだね……」

「エトナさん！ラハールさん！そういう事は言っちゃいけません本当の事でも！！」

フロンの一言が一番ゴードンに刺さっていた。

「ヨカッタ、ヨカッタ」

「ちっとも良くなーーーーーい！！」

貧乏くじ兼いじられキャラクターはゴードンで確定である。

「それじゃ、戴冠式に呼んでね」

「正直私はもう行きたくないのだが」

「ムリダトオモウ、アキラメロ」

サーズデイの何の慰めにもならない言葉がさらに刺さる。まぁゴードンはどうでもいい。

そして、もう1人の地球勇者も旅立とうとしていた。

「カーチス君はどうするんだい？」

「オレはこの姿のまま地球勇者をつづける」

「そうか、いつでも地球に来てくれ！」

「おう！」

カーチスは生前の罪を償うためと自分への戒めのためにプリニーの姿のまま地球勇者として旅を続けることを決めた様だ。

「それでは、さらばだ！」

「またな」

ゴードン達を乗せたスペースシップはエンジン音と共に勢い良く魔界の空へ飛び立って行った。

カーチスもどこかへ行ってしまった。彼らなら地球のことは問題ないだろう。

「賑やかな奴らだったなぁ」

「あれぇ、殿下もしかして寂しいんですか～」

ニヤつきながらエトナが尋ねる。

「バ、バカモノ！家来が減って仕事が増えるのが嫌なだけだ」

「フフフ、本当に素直じゃないですねラハールさん」

「ええい、そんなことより魔王になるための式やら後片付けがあるだろうが！さっさとやるぞ」

「はい！」

そうこうして、天界も魔界も人間界も三界それぞれが慌しくなっていた。

――天界――

「本気ですか！？大天使様！！」

「ええ、本気ですよ」

周りの天使達にとっては重大な決断をしているのに、ラミントンはさして重大そうではないと見える。

「あの、汚れている悪魔達と交流を再開するなどと、どうしてですか！？」

護衛の大天使兵達が強く言い詰め寄る。

「どうして彼らが汚れているのですか？そんな偏見に曇った目では何事も進歩しませんよ。それに今すぐに交流を再開するというわけでもないですよ」

「は、はぁ……」

大天使兵たちをあっさりと受け流すラミントン。

「そう。交流を再開すればいつかまた、あの時のように……」

――人間界――

「……と言うわけで地球防衛軍総司令カーターは逃走して現在行方知れずとなっています。そして、ジェニファーを助ためるに３８代地球勇者カーチスは死去しました」

ゴードン達が地球に帰ってからと言うもの連日記者会見やら報道で大変なようである。当たり前と言ったら当たり前なのであるが。

「しかし、短かったとはいえ大変な日々だったな」

「フフ、そうね。でも、とても楽しかったわ。ラハールちゃん達のおかげね」

「いつか、ちゃんとした地球勇者として魔界と人間界で交流をはかりたいものだな」

「あら、ゴードン魔界はもう行きたくなかったんじゃないの？」

「いや、えぇとそれはだなぁ」

ジェニファーが少し微笑んでいた。どうやら人間界と魔界の交流が出来る日も遠くなさそうだ。

「ホントウニ、メデタシ、メデタシ」

ーー魔界ーー

「ええい、何だ！この手紙と資料の山は！！」

そう、ラハールの現在の問題は貴族悪魔達から来た手紙やクリチェフスコイが残した事などを確認および解決の方法などをしなければならないのだ。

「まぁ、魔王様の仕事と思って頑張るしかないですね～」

そんな気の抜けたことを言ったエトナにラハールがすぐに言い返す。

「バカモン！！お前もやるに決まっておろうが！！」

テキトーに言い流して逃げようとしたエトナをキッチリ仕事場に押し込む。

「そうですよエトナさん。私達もしっかり手伝わないと」

フロンは言わずもがなだった。

ーー数時間後ーー

「あ、あの～ラハールさん、エトナさん大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫では……ない」

「あ、あたしもぉしんどい～」

戦闘は大得意のラハールたちだがこうゆうデスクワークの仕事になるとボロボロになるようである。

「あと少しですよ～ほら頑張って立ってくださ～い」

半ば強引に2人を机に戻し書類の山を再処分し始める。

――さらに数時間後――

「終わりましたよ～ラハールさん！」

全部終わったがラハールとエトナは見るも悲惨な状況である。まるで、天然の生きた干からびたミイラのようになっていた。

「お、俺様はもう一歩も動け～ん」

「フ、フロンちゃ～ん。何かたべものちょうだ～い」

「あ、はいはい！わかりました～」

そうこうして、三界はあわただしくも少しづつ落ち着きを取り戻していった。

ーー半年後ーー

そうこうしながら忙しい最中ようやくラハールの戴冠式が行われた。先の通り貴族達は問題なかったのがとにかく時間が掛かったのが地球防衛軍と戦って荒れ果てた魔界の復興と魔王に相応しい魔王城の改装修理である。

まぁ兎にも角にもとりあえず舞おうとして正式に認められたのである。

「どうだ？」

礼服を見せて、本当にどうだと言わんばかりの態度である。

「まぁ魔王っぽいですね～」

エトナが二ッと笑って見せた。

「ぽいとはなんだぽいとはーーー！！どこらどう見ても魔王だろうが！」

「そう思うなら聞かなきゃ良いのに」

エトナがぶつくさ言いながらもどこか笑みをうかべていた。

「地球勇者ご一行様到着したっすよ～～～！」

「分かった、今行く」

来賓用に用意した特別の部屋にゴードン達が来ていた。

「よく来たな」

「おう、魔王就任おめでとうだな」

最初に口を開けたのはカーチスだった。

「ほう、お前も来てたか」

「まぁな」

「地球勇者としてどう言うべきか分からないのだが……」

「ラハールちゃんおめでとう。立派な魔王にね」

「ジェニファー」

「マァ、キョウグライイインジャナインデスカ、キャプテン」

「サーズデイの言う通りよ。あなた」

そこにフロンもやって来た。堕天使の格好でドレスアップしていた。

「あら、フロンちゃん。仕事はどう？大変なんじゃないの？」

「はい。でもやりがいがありますし大天使様に言われましたからね。それに多少きつく教えても魔界の人は丈夫ですから」

ニッコリしてはいるがその手には杖を片手にポンポンともう一つの手の平で杖を打ち付けていた。

「ジェニファーここだけの話魔法も唱えたらしいわよ」

「……大分魔界に染まって来ているわね」と聞こえないように呟いた。その時にフロンはジェニファーの指についている指輪に気が付いた。

「ジェニファーさん、それもしかして」

「ええ、この人と婚約したの」

「そうだったんですか、式にいけなくてすいません」

そんな、温かい反応のフロンとは逆にジェニファーはゴートンに対して冷たい目を送っていた。

「ご、ごめん！映画の撮影に追われて行けなかったんだ」

「もう！恩人に対して知らせを送るのは当然でしょ」

「今から尻に敷かれてますよ。殿下」

「本当に大丈夫なのかこの夫婦」

ゴードンが話を逸らさんとばかりに映画のディスクを取り出した。

「ほ、ほら！出来たばかりの映画を持ってきたぞ」

「あ！ゴードンさん私のデザインしたロボはどうでした！？」

「す、すまん。却下されてしまった」

「う、そうですか……」

一気にしょんぼりするフロン。

「でも、お陰で他のキャラがデザインしやすくなったと言っていたし、それと後でガルガンチュアのミニ模型を送るから」

「ほ、本当ですか！」

あっという間に元気を取り戻すフロン。

「案外単純ね～フロンちゃん」

「よし！とりあえずその映画見るぞ！」

「え？いや私達が帰ってからの方が……」

「ますます気になったぞ！おいプリニー」

「アイアイサー！」

ゴードンからディスクをぶんどり映像を流す。

『ＷＡＲ　ＯＦ　ＴＨＥ　ＭＡＫＡＩ２』

派手な音と音楽が流れてエンドクレジットが流れて行く中やや不機嫌な声でラハールが尋ねる。

「おい、ゴードン」

「な、なんだ？」

「俺様の下僕の癖になんだこれは！？俺様とお前が同格ではないか！！」

「そ、それはだなぁ」

言い訳を重ねようとしたゴードンだがそこでラハールは言うのをやめた。

「まぁ、人間界にはこれぐらいの方が丸く収まるか」

「あれ、怒らないのラハールちゃん」

「まぁ大体の内容は俺様達が戦った内容と合っているからな」

「フフフ、ラハールさんも寛大になりましたね」

フロンは少し微笑んでいた。その隣で何故かエトナも微笑んでいた。

「殿下ー、星の墓場にまた時空の歪みが発生したっす～～」

「こんな時にか！全く！」

「で、どうするんですか？行きますか？」

ニッと笑いながら尋ねる、エトナ。

「行くに決まっておろう。そいつも倒して家来にしてやる」

「ほんじゃ行きますか」

「お前達も用意しろ」

こっそりと逃げようとしたゴードンに容赦なく命令する。

「仕方ないな」

「それじゃ行きましょう」

「ジュンビＯＫデス」

「おし！こっちも良いぜ！」

「なら行くぞ！」

―そうして百年の時が経った―

ラハール達は立派……とは行かないが少しづつ魔王らしくなっていった。三界の戦いの後にも様々な事件、戦いが起きた。ラハールの叔父、叔母であるヤスールとヴェスヴィオとの遭遇、ヤスールの双子の息子シャスとキラとの戦い。再び天界に赴きフロンの両親エール、テールそして、妹のオゾンとの出会い。自らの出生の秘密と母親を魔界に落とした元大天使のパートナーサクラとの戦い。本当に様々な戦い、出会いがあった。

そうして、成長していっていたラハール達にある情報が入った。以

前ヤスール達が開放した超魔王バールあれが、全くの偽者だったという情報である。

そして、真実を知ったラハール達は死闘の末に本物のバールを倒した。

……そして、ラハール達は

◇

「ハァ、ハァ、奴は倒れたか？」

「そ、そうみたいですね」

「み、皆さん大丈夫ですか？」

「大丈夫なわけないだろ！フロン僕達全員魔力だいぶ使い果たしたんだから」

「この世に、まだまだこのような強者がいるとは」

全員、疲労が見えている。もうどうやっても戦えない状態である。

「……見事です」

「だ、誰だ！？」

「見事です。ラハールよくぞ、そこまで成長しました」

どこからともなく掛けられた声に戸惑っている。だが、懐かしい声である。

「（この声は……まさか！？）」

「あなたが倒した超魔王バールはあらゆる次元の魔界を支配せんと企む強大な悪魔でした……。
あなたの父も、彼の野望を阻止するために命を掛けて戦いました……。」

「オヤジが……？」

「……そう。あなたの父は超魔王バールを封印する事には成功しましたが、魔力を使い果たしてしまい……」

「そうか……。オヤジはヤツとここで戦って……」

「（……）」

エトナは懐かしい声の人物がしゃべりかけてから無言のままである。

「ラハールよ……。あなたは父親が残した魔王の使命を受け継ぎ、見事に成し遂げました。これからは『超魔王ラハール』を名乗るがいいでしょう」

「お前は……一体？」

「……。ラハール立派な魔王になるのですよ」

「！！」

最後の一言は優しげな父親の一言だった。

「……なってやるさ。天界の時にも言ったはずだ必ずなってみせるぞ俺様は！オヤジを超える魔王に」

◇

一行は魔王城に帰ってきていた。あの後すぐに全員バッタリと気を失って倒れてしまっていた。幸い死にはいたらなかったが一週間以上寝ていた。

「ん～～ん？ここは……魔王城か？」

「あ、起きましたかラハールさん？」

「ラハ～～ル！」

「ラハール様！」

相変わらず2人はいきなりラハールに飛びつく。

「こ、こら離れんか！」

「オゾン！サクラさん！ラハールさんが困ってるじゃないですか離れなさい！」

「いやだずっとこうする！」

「ラハール様は私のものです！」

サクラはもう剣から手を離していたためもう元に戻っていた。
ただでさえ困っているラハールのところにシャスが来た。
「ラハールちゃん遊ぼ〜〜」
「おい！俺様はけが人だぞお前のは遊びではないではないか付き合えるかーー！」
「ここの生活は一生変わりそうに無いわね〜〜」
ほのぼのしながらエトナはそう言った。ラハールはそんな場合ではないのだが。

超魔王を倒し成長したラハール。そのごラハールは支持率を今までよりさらに上げた。元来のひねくれは治らないが皆に尊敬される魔王になったのは確かである。
フロンは天使試験を合格し再び天使に戻れることになった。無論堕天使の力は消していない。フロン自身の希望とラミントンの計らいによって残してもらえた。
そうこうして百年のときが経ち天界と魔界は再び交流を再会した。様々な障害はあったものの超魔王と新たな大天使の友好関係で問題は無かったようだ前魔王と前大天使が見た夢は実現していた。

そこはどんな闇よりも暗く、どんな海よりも深い場所にあるという。闇に魅入られた禍々しきもの達が集う暗黒世界……

かの地がどこにあるのか。それは定かではない。

しかし、誰しもが心の奥底で信じ恐れていた。

だが、今は天界の元住人と人間そして悪魔達が共に生きている。

少し変わっていてそして、不思議な世界。

魔界戦記ディスガイア　その後（後書き）

はい。鉄コンです。追加しました。どうでしたでしょうか？正直まだまだ僕自身の中では改良の余地はあるんじゃないかと思います。よかったらメッセージボックスの中に入れてもらえたらなと思います。では

魔界戦記ディスガイア2　その後

ずいぶんと時間がたった。2人はようやく腕をほどいた。
顔が2人とも随分赤く赤くなっている。ロザリーにいたっては嬉し涙が目にまだ少し溜まっていた。
だが、もうしばらく時間が経ちロザリーが顔をしかめた。

「ア～デ～ル～」

危険を感じたアデルはすぐさま退散。さっきまで通路からかなり距離があったのにタローとハナコにもう追いついてしまった。

「逃げるぞ！タロー、ハナコ」

「待てーーーーーー！！」

こんな状況にもかかわらず、2人は

「兄ちゃんグーー！」

「何で怒ってるの姫様～～～？もしかして照れてるの～～？」

「て、照れてなどいない！」

わざと言っているのか天然で行っているのか分からないが、火に油を注いで余計にロザリーを怒らせてしまった。天に銃を打ち続ける。火花の音は良く響いていた。

「全くあれが本当にさっきまでの2人か～～～？」

「ま、良いんじゃないんですか？陛下」

「それじゃ、アデルさんの家に私達も行きましょう。アデルさんのお母さんがご馳走作って待ってるって言っていましたしね」

「うむ、かなりの数の魔王を倒して俺様も腹が減った、結局さっきの騒動でハナコの弁当も食いそびれたしな」

「それじゃ、行きますか？」

「行きましょう」

後ろから雪丸と斧雪が全員の様子を見ていた。

「雪丸よ」

「何でゴザルか？兄者」

「お主は本当に良い仲間を持ったようだな」

「兄者……はいでゴザル」

「それでは拙者達もアデル殿の家に戻るか」

「はいでゴザル！」

可愛そうに誰一人として気付いてもらえないのが1人いや一匹

「み、皆さ～ん。ボクチンのことを忘れないでくださいよ～」

◇

「ただいま、父さん、母さん」

「皆、お帰り」

この『お帰り』という言葉が何度彼を元気付けたのだろうか。何気ない一言だが大切な一言なのだ。

「アデル、その私達ね記憶が戻ったの。大切な記憶が」

「話しておかなきゃならない。それで、悪いけど皆さんには席を外して貰えませんか？これは本人にとって大事な話なので」

「いや、皆にも知ってもらいたい」

「でも……」

「いや、いいんだ父さん。皆には一つでも自分の事を隠しておきたくないんだ」

「そうかい。分かった」

◇

何時間か経った。アデルの家族のこと、アデルが何故ゼノンの呪いを受けなかったか、アデルを置いて行くほどやらなきゃいけない事全てを聞いた。

当然アデルは驚いていた。だが、意外にもその驚きは皆から見ると

それほど驚いていないように見えた。

「そうだったんだ。俺は悪魔だったんだ。俺は両親の事を理解してなかったんだな」

「ア、アデル……」

「安心しろロザリー。正直驚いたり悲しかったりしたけどそれなりに嬉しいんだ。俺の本当の両親はこの世界を守るため、そして何より俺達を守るために戦ってくれたことが」

アデルの目は本人の言った通り確かにそんな目だった。だが、ロザリーただ1人だけがその奥にある思いを見抜いていた。

「さ、そうと分かったら暗い話はここまでよ。皆ご飯食べましょう。今日はご馳走よ！」

「わ～い！」

「ママの手料理おいしいんだよ～」

「ハナコがそう言うんなら期待できるな」

「それでは、お邪魔するでゴザル」

その後はもうどんちゃん騒ぎ最初の内は皆旨すぎる料理で盛り上がっていたのだが、アホな豆粒魔王とアホなペタンコ魔神のせいで……

「誰がアホな豆粒魔王だーーーーーーー！！！」

「誰がアホなペタンコ魔神ですってーーーーーー！！！」

うるせぇ！！出番減らされたくなかったら黙っとけ！

「うぐ、前の小説ではそれは無残な目にあっていたくせに」

やかましい。俺みたいなただのしがない一般人の駄文小説家とてめぇらみたいな人間でもないデタラメ化物の万国ビックリショーに巻き込むんじゃねぇ。お前らの攻撃食らってたら身が持たねぇんだよ！

「デタ……（怒）」

……あ、失礼しました。

そういうわけでアホ2人のせいで（省略）好物の取り合いになって表で大騒動になったのである。

ちなみに何で家の中で騒動にならなかったと言うと、アデルのママさんの圧倒的圧力に2人は負けてすごすごと退散させられたからである。

そして、騒動が終わったその後の夜、寝転がりながら1人月を見上げているものがいた……アデルである。

「……ふぅ」

今までの疲れが溜まっていたのかはてまた別の理由かでため息が出ていた。

「アデル、眠れないのか？」

ロザリーも眠れないのか表に出てきたようだ。

「まあな」

「……」

「……」

しばしの間沈黙が続いたが先にロザリーが口を開いた。

「アデル、今日は本当に世話になった。礼を言うぞ」

「何をいまさら。お前を守るって約束しただろ」

「アデル……」

この一言でロザリーは本当に安心できるようになる。だが、何かを怖がっていた。

「でも、余はロザリンドであると同時に魔王神ゼノン。これから必ず余の命を狙いに他の魔界から魔王魔神が押し寄せてくる。その時今回は自分の力だけですんだが、いつか暴走してしまうかもしれない。それが、怖いんじゃ」

静かに涙を流し体を震わせていた。

「さっきも言ったろどんな時でも必ずお前を守るって」

「アデル……」

2人は身を寄せ合って唇を寄せた。
その様子を影から今の両親は見守っていた。
「あの子は本当に強くなったわね」
「そうだね。これからも僕達はシュラやセリオンのため何よりアデルのために彼らを見守っていこう」
「そうね」
そして、屋根の上で見上げているものが約三名ほどいた。
「あ〜〜あ、熱うぅ〜〜」
「ね、ね、ね！ラハールさん私の言った通りでしょ！悪魔にも愛はあるって！」
「ええい！興奮するな！何て恥ずかしいことをしているのだあの2人は」
「陛下どちらかと言うと私達がお邪魔なんじゃないでしょうか？ほら、フロンちゃんもちょとは落ち着く」
そう言って二人を引っ張って家に放り込んだ。意外と空気は読めるほうである。
だが、フロンは「あ〜〜もうちょっと見たいのに〜〜」と駄々をこねていた。このアホ3人組は相変わらずである。
「あ、エトナ」

「ありゃ？ハナコ起きてたの？」

「うん。それよりちょっとお願いしたいことがあるんだけど」

―翌日の朝―

「もう行くのか？」

「うむ、早く里の者にゼノンの事を伝えたいからな」

「そうか……世話になったな雪丸、斧雪」

「礼を言うのはこっちのほうでゴザルよアデル殿。大切な事を今回色々と教わったでゴザル」

「ねぇ斧雪さん。お願いですから元の姿に戻していただけませんか～」

「「ダメ、あんたはそっちの方がマシ」」

「僕もカエルの方のティンクが良いと思うな～」

これはどういう事かというと
昨日ティンクにかけた術を斧雪が解いたのだが、ロザリンド以外人間型のティンクは全く知らなかったためやや期待があったのだが……人気が全く無く皆の意見であっという間に元に戻されてしまったのである。まぁ当たり前って言っちゃ当たり前なのだが（笑）

「姫様からも何か言ってくださいよ～」
「諦めろティンクお主の運が無かったということじゃ」
「そ、そんな～～～」
哀れなティンクである。
「それではまた会うときまで」
「おうまたな」
「さらばでゴザル！」
そう言った瞬間にあっという間に影一つ無く消えてしまった。ちなみに今2人はもう雪の積もるところまで来ていた。
◇
「雪丸よ……」
「ん？なんでゴザルか兄者？」
「……いや、何でもない」
「？」
（強く大きくなった。雪丸よ）
◇

「さてと、俺様たちも帰るとするか」
「そしますか」
「皆さん、お世話になりました」
礼儀正しいのはフロンだけである。
「礼を言われるような事は何もしておらんよ」
喋っている間にラハールが自分達の魔界に通ずるゲートを開いていた。
「よっ」
「それでは」
「ハナコ～行くよ～」
「は～～い！！」
「「え！？」」
「それじゃ、パパ、ママ行って来ま～す！」
「ちょっとハナコ！」
「ほれじゃお二人さんお幸せに～」

最後の一言に2人は顔を赤くしていた。

「行っちゃたね」

「もう、うちの子は本当に落ち着きが無いわね」

叱るべき内容の言葉なのに。笑いながら言っていた。

「アデル良いのか？」

「あいつらなら、問題ないだろ」

「ふふ、そうじゃな」

◇

数日後

あの事件後ヴェルダイムは穏やかな日々に戻っていた。ロザリーが懸念していた他の魔界からの襲撃も無く。だが、今日その理由が2人は分かるようになる。

朝一番に起きたのはどうやらロザリーのようである。

「ふぁ～～あ、何じゃまだアデルは寝てるのか。しょうがない」

そう言いながらテレビをつけた。そして、その内容にロザリーはとんでもなく驚きアデルの部屋に向かった。

「ア、アデル！！」

「うん？どうしたロザリ～？」
「いいから、こっちに来るんじゃ」
「何だよ、急に？」
「とにかく、これを見ろ！」
「ん、テレビ……ってこれ」
そう、そこには何とアクターレが写っていたのだ。しかも、大パレードの主役のど真ん中に。
「何だ、このニュース」
「余が見る。どれどれ、魔王ゼノンはアクターレ氏のデマだった事は全魔界中に衝撃を与えました。……なんじゃと！」
「しかも、この後すぐに別魔界の魔王にぼこぼこにされったって書いてあるぞ」
「無残じゃな～～～」
「アデル～～～君宛に手紙届いてるよ」
「あ、ああ分かった誰から？」
「ええと、アクターレって人から」

「な、何ーーーーー！！！」

とんでもニュースとアクターレの手紙でさらに驚くアデルとロザリー。中身はと言うと。

◇

我が永遠のライバルよ

魔王ゼノンは倒したようだな。

おかげで俺はぼこぼこにされたがスターの座に返り咲く事が出来たからまあいい。

とにかくだ俺様の活躍が無かったら魔王ゼノンを倒す事が出来なかったのは忘れるなよ！

それさえ忘れなきゃ後の事は任せとけ！！

ちなみに、中に入ってるチケットはサービスだ！！

◇

「……何とも恩着せがましそうな文じゃの～～～」

「確かにな。までもあいつのお陰でお前が心配していたヴェルダイムが別魔界の魔王に襲われる心配は無くなったわけだな」

「その分でいったら少しは感謝せねばいかんわけじゃな～。なんと

なく嫌じゃけど」

その手紙を読み終わった後何故か感慨深そうに空を見ていた。

「なぁ、ロザリー」

「なんじゃ、アデル」

「色んな事があったよな」

「……そうじゃな」

「そ、そのロザリー」

「ん？」

少し恥ずかしそうに口を開くアデル。

「今更だけどありがとな」

その後にロザリーも少し顔を赤くしながら

「う、うむ余もじゃありがとう」

と言った。

◇

平和な時が流れ一年が過ぎた。

『魔王ゼノンの事件から早一年が経過しました。あの騒動が全てアクターレ氏のデマだった事は全魔界に衝撃を与えました。アクターレ氏は別魔界の魔王にぼこぼこにされましたが、全く反省の色も無く「俺様が真のダークヒーローだ！」と言い放ったのは記憶に新しい所です』

ｐｕｔｕｎ

「また、このニュースかアクターレの奴やりたいほうだいね」

「ハナコ～その手紙アデルの所に送るんでしょ？魔界郵便屋来てるよ～」

「あ、は～い」

「あ、それと今日はラハール陛下の命令でゲヘナの海のキングドラゴンを退治しにいくんだからね～」

「は～～～～い！」

ハナコはラハール、エトナにも気に入られているようだ。プリニー隊もハナコに飯を作ってもらって大満足のようである。ちなみに、プリニー達のほぼ全員がハナコについているのは言うまでもないがまぁそれはともかくあっという間に手紙は宛先へ届いた。

―ヴェルダイム―

「アデル～手紙がお主宛に来ておるぞ～」

「あ、はいはい。おっ！ハナコからだ」

「おお、ハナコ殿からか一年ぶりでゴザルな」

「見せて、見せて～」

「そうだな、見てみるか」

アデルにーちゃんへ

お元気ですか？私は元気ですアクターレはそっちでもテレビを騒がせていますか？私は案外ちょっと嬉しいかな。この前雪丸と斧雪からお菓子が届きました。里お越しするんだって張り切ってるみたい。それで、雪一族の秘伝のお菓子を食べさせもらいました。おいしさは折り紙つき最後の一つをめぐってエトナとラハール陛下がお城を半分消し飛ばしました（笑）

「（笑）じゃないだろハナコ。不安だ……」

「だ、大丈夫なのじゃろうか」

「大丈夫じゃないと思うよ～」

「そんなにおいしかったのでゴザルか」

近いうちにに一ちゃんのとこへ遊びに行くそうです。

ところで、パパとママはまだ怒ってるかな。……せっかく人間になれるっていうのに家出同然でこんなことしたらそりゃ怒るよね。

「フフフ、そんなことで怒らないわよ。ね？」

「うん。その通りだよ」

でも、もう私はもう決めたんです！エトナみたいな悪魔に魔神になるって！

それじゃアデルにーちゃんロザリンとずっと仲良くしていてください。ってケンカするはずも無いか。

P．S

でも、一年経ったいまでもびっくりしています。アデルにーちゃんが悪魔だったのは。姿が変わらない本当の理由にそうゆう事が隠されていたなんて。でも、アデルにーちゃんとロザリンにはそんなの関係ないよね。アデルにーちゃんとロザリンの結婚式私達呼んでね！

ハナコ

P．Sの最後の一言に2人はひどく赤面していた。

「ま、まぁ元気そうで何よりじゃな」

「あ、ああそうだな」

皆が笑って2人を見るもんだから2人はたまらず言い訳をして外に出た。

「ふぅ〜〜〜」

落ち着いた所で、もう一回P．Sを見た。そして、アデルは小さく

呟いた。

「悪魔……か」

「お主、やっぱり母親から話を聞いたときからまだ自分が悪魔で会った事に抵抗があるのか」

「気付いてたか」

「何となくではあるがな」

「今まで毛嫌いしていた悪魔がそんなに悪い奴だと知れたかな。お前や父さん、母さん、ラハール達それにお前を育ててくれた名も無き魔王も結局はお前を大切に思ってくれたからな。それで自分が悪魔だとしって正直複雑でな……」

「……」

少し沈黙が続いた。

「そうか、そうじゃよな」

少し間をおいて「でも」と言いアデルに寄りかかった。

「おっおいロザリー。こんなところで」

「悩むなアデル」

「え？」

「余はお主のことが好きじゃ。だから、おぬしが人間だったら少しの間しか一緒にいれなかった。それが怖かったのじゃ。でも、おぬしが悪魔であった、そのお陰で千年でも、一万年でもずっと、ずっと、ずっとこうしていられるではないか」

「そうだな」

数年後

アデルの家にはある写真が飾られた。

その写真には生長したタローとハナコ、アデルの両親、雪丸、斧雪、アクターレ、ラハール、エトナ、フロン、ヴェルダイムの村の面々そして皆の真ん中には顔を赤くしながらも最高に幸せな笑顔で写っているアデルとロザリンドがいた。

魔界戦記ディスガイア3　その後

「我は魔王になる。あんたを超える最高の魔王にな！」

マオは成仏した父親に向かって大声で叫んだ。あの世にも届くように。涙が零れ落ちる。マオは1人理事長室の外でたたずんでいた。今までのことを思い返しているのか、父親との思い出を見ているのかどうかは本人しか分からない。だが何かを決意しているそんな目であることは確かであった。

「マオ、終わったかい」

「ああ」

「それじゃ、帰ろう」

「お前が仕切るな。子分の分際で、それにやることが残っている」

そう言って極上のサルバトーレの方を見た。

「分かっているのなら話が早い。決着を付けさせてもらうぞ、魔王の息子よ！」

「……あ」

アルマースはあることに気づいた。サルバトーレが無茶苦茶な事を言っていないのである。彼女がそうする時は自分と同じか強い相手にしかそうしないのである。そう考えているとアルマースは自然に

笑みがこぼれていた。

「マオの事を少しは認めてくれたのかな……」

三号生最強の十紳士と魔王の息子、否魔王との壮絶な戦いが始まろうとしている時に笑顔になれるのなんてアルマース位であろう。

「ヴァサ・アエグルン！！」

「極上・銃王無神！！」

戦いが始まっていきなりお互いの最強技がぶつかり合う。

「「うぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！」」

剣撃、銃撃全くの互角の戦いである。一進もしなければ一退もしない。まさに意地と意地のぶつかり合い。

「ノック・バックピアス！！」

「飛天双翼降臨の太刀！！」

再びぶつかり合う技と技。激しい閃光と風圧が生じる。しかし、力の差が全くと言っていいほどなくお互いに決まり手がない。

「「ハァ、ハァ……」」

戦いが始まってもう半日が経っていた。２人とも傷だらけになり息も上がっている。ほとんど魔力も使い果たしてしまった。今にも倒れてしまいそうな状況である。

「……」

アルマース達は見守ることしか出来なかった。沈黙が続く。最後の一撃を決めるチャンスを瞬間を2人はじっと待っている。沈黙が続いて約数分。一つの大粒の汗の玉が地面に落ちた。その瞬間に最後の一撃を決めに掛かった。

「ヴァサ・アエグルン・リミテッド！！」

「極上・銃王無神・限界点！！」

2人の最後で最高の一撃がぶつかり合う。それでも全くの互角。エネルギーがぶつかり合い続ける。

「「あああああああああ！！！！」」

エネルギー同士のぶつかり合いが続きとうとう境目から大爆発を起こした。だが、それでも尚2人は立ち上がる。2人の身体はとうに限界を超えていた。本当にちょっとした衝撃でも倒れてしまいそうである。それを見かねてアルマースが止めに入ろうとした瞬間

「そこまで！」

ビッグスター様が入った。

「邪魔をするな！！ビッグスター様よ」

「我の真剣勝負だ。そいつの言うとおり水を差すな！！」

やれやれとため息をつく。

「確かに君達の言うとおりだよ。真剣勝負の邪魔をした許されぬべき無粋な行為は許してくれなくても構わない。しかし、君達はこれからの魔界に必要な存在なのだよ。それをここで失くすなどあまりにも惜しいのでね」

2人はその言葉に渋々と納得した。

「チッ、だがこの戦いは間違いなく我の勝ちだぞ！！」

「ぬかせっ！！私の勝利に決まっているだろうが」

言い争いは続いたが長くは無かった。傷口にしみたのかあっという間に2人は気絶してしまった。その後、保嫌室で丸一日療養のため寝ていたらしい。だが、悪魔は傷が治るのが早いのか次の日になると極上のサルバトーレは消えていた。ビッグスター様も2人の安否を確認し二号生校舎へ帰っていった。

「（これで全て終わったな。拙者の役目はこれで終わりぞなもし。後は全て任せたぞ若き魔王とその仲間達よ！な～～はっはっは。な～～はっはっは）」

ー数ヵ月後ー

「「「オ～ヤビ～ン準備出来やしたよ～」」」

きっちりハモっいる三兄弟。まぁそんなことはどうでもよくて、今日はマオの理事長兼魔王の就任式である。洗脳の解けた生徒達は事の顛末を知り一号生は勿論の事二号生もビッグスター様が動いていてくれたのかすぐに受け入れてくれた。三号生の方は元々気ままに動いていたのが大多数なので魔王がいようがいまいが関係ないみたいである。だが、超勇者を倒した悪魔として尊敬されていたのは間違いないようだ。

「じいや、他の準備もできているか？」

「ほっほっほ。もちろんでございますぼっちゃま。こんなこともあろうかと予め準備していました」

「相変わらずの準備の良さですね。じいやさん」

「当たり前だ。それがじいやだからな」

じいやの事なのに何故か威張っていた。２００年前最強の魔王に挑んだ超勇者オーラムはもう死んだのである。今更じいやの事を深く詮索するものなど１人もいないだろう。

マオは理事長室の屋上にでた。そこからは耳を破るかのような歓声が飛び込んできた。

「オーヤービーン！オーヤービーン！オーヤービーン！オーヤービーン！」

「魔王！魔王！魔王！魔王！」

尊敬されているマオはどこか誇らしげだった。そんなマオをみてラ

ズベリルも何故か誇らしげだった。
魔王の就任式言うよりパレードかお祭りだった。そして、お祭り騒ぎが終わりマオ達だけの宴会に入る
「ん？何だこのご馳走は！？誰が作ったのだ？」
そう、宴会用のテーブルにはもうすでに料理が作られて置いて合ったのである。しかも、最高の匂いの物を。
「じいやさんですか？これ？」
「いえ、じいではありません」
「あ、マオ手紙が置いてあるぜ」
その手紙を拾って読んだ。
マオ達よ後のことは頼んだぞなもし！！　チャンプル
「あの、無免許家庭科教師めが……」
「でも、結局あの人は何者だったんだろう？」
「いいんじゃない？どんな奴でも」
「そうゆう事じゃ！さ、せっかくチャンプル殿が作ってくれた料理じゃ食べようぞ」
結局チャンプルのことは誰一人分からずじまいだったが、今の彼ら

はただ旨い料理を食うことにしか頭に無いようだ。

―数日経ったある日―

「ほっほっほ、アルマース殿、サファイア殿人間界のルート確保できましたぞ」

「ありがとうございます。じいやさん」

「ほっほっほ。礼には及びませんよ」

「それじゃ、帰るかの」

魔界に来てからたった数ヶ月だったが2人にとっては一生忘れることの無い経験になったであろう。それに、魔界で本物の勇者にそれも悪魔達のおかげでなれたのなんてアルマース位だろう。

「もう少しいればいいのに」

「そうしたいのは山々なのじゃが何分国を飛び出したのでな。こんなにカワユイ悪魔がいるのにな～」

そう言ってラズベリルに抱きつく。「よ、よせ姫様。抱きつくんじゃない」と言っているのにお構いなしにきつくやっている。ラズベリルはすでに窒息寸前である。アルマースはその様子を見て微笑んでいた。

「……ってあれ？マオは？」

辺りを見回してもマオは何処にもいなかった。

「こんな時に何をやってんのかね、アイツは」

「ハハハ、いいですよ。マオは毎度こんな感じだし」

苦笑いしながらじいやの所に行き時空ゲートへ乗りそして、あの人間界のゲートへ。

アルマースにとって良い所であり悪い所である。なんせ一回ここで死んでいるのだ普通は悪いところでしかない。だが、ここでアルマースは本物の勇者になったのだ。だから、良い所とも言える。

思い出を感慨深く思い出してるうちに人間界へのゲートに来た。そばまで行こうとするとそこにはマオがいた。

「マオ！？あんた来てたのかい」

「フン、少し用事があっただけだ」

「珍しいね～アンタが先に準備して待ってるなんて不良みたいなことをするなんて」

少し意地悪な笑みを浮かべてそう言った。

「ア、アホ！人間界の力を利用できぬか調べていただけだ」

「でも、アタイが人間界の事を勉強していた頃アンタは『人間界は魔力や霊力が弱すぎて利用する価値がない！』っていってたじゃないか」

「そ、それはだな……」

どんどん墓穴を深く掘っていくマオ。

「ありがとう。マオ」

「勇者が悪魔に礼か！珍しいものだな」

皮肉めいた言葉だったが嬉しそうに言っていた。そして、魔王を倒しに来たはずの勇者と姫は人間界のゲートに入る。

「それではの！礼を言うぞ」

「ありがとう！マオ！ベリルさん！」

「またな！」

「……」

マオは小さく呟くように言った。

「また……来い。勇者アルマース」

光に包まれてアルマースとサファイアは人間界に戻って行った。

……こうして僕の魔界での冒険は終わりを告げた。本当にたくさんのことを知った。悪魔の事、魔界の事、魔王の事、そして、人間も悪魔も関係ん く仲間になれる事。

僕は一生忘れないだろう……

あの後、人間界に帰ってきた僕らを待っていたのはなんと僕と姫様の結婚式。僕は姫様に休む間もなく教会に連れ込まれた。『結婚すると分かれば位が違いすぎるとかでしり込みするじゃろう？』だって。

僕は姫様に一生勝てそうに無いよ。正直嬉しかったけど周りが認めるわけがないと思っていたのにあっさり認められてしまった。何でも『姫様を無事生還させた勇者』なんて勝手な噂が流れていたらしい。僕はそんな凄いことはしていないのに。

結婚して数年後マオとベリルさんから手紙が届いた。
そこには、たくさんの仲間と生層に囲まれた、幸せそうにしている花嫁姿のベリルさんと恥ずかしそうに目をそらしているマオの姿があった。

とりあえずのあとがき

久ぶりのかたも、誰お前と言う方もこんにちは。鉄コンです。いや～何ヶ月ぶりでしょう小説書くのは……うっわ二ヶ月も前だよ。誰だ！これ書いてるのは！って僕ですよ。……はい。しょうもないこととしてすいません。

とりあえず、ディスガイアの短編小説はこれにていったん区切ります。もちろん不定期ではありますが書く予定はありますよ。あと二ヶ月くらいですかね。魔界戦記ディスガイア４の後日談も書く気満々ですし、他のも書く気満々です。いままで間を随分開けてた癖して胡散臭いと思われますが必ず書きます。

しかし、正直２，３は満足の行く出来にはなったんですけど、初代はどうにも難しくて困りました。特にラハールは色々な顔を見せるので書くのが大変でした。でも、ラハールをはじめ初代、２、３、と書いててとても楽しかったです。友人の中に４のキャラを混ぜて話を書かないのと聞かれたのですが、正直僕はストーリーを全部見ないとちゃんとキャラはつかめないほうなので書けないんですよ。我ながら情けない。でも、その分自分の中でちゃんとしたものを書いていこうと思うのでこれからもよろしくおねがいします。

あ、それともしこんな話を書いて欲しいと言うリクエストがあったらメッセージボックスに入れてください。文才がない僕ですが頑張ってみます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0675o/

魔界戦記ディスガイア AFTER OF THE MAOH

2011年1月13日17時01分発行